明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種郵便物認可
第五十七號、毎月二回（一日、十五日發行）
明治三十四年六月十五日發兌

教時報

◉政治家……社說
◉宗教家
◉廢物利用……論說……文學博士　村上專精
◉經濟界の恐慌に就て佛教家に望む……雜錄……諏訪谷生
◉西教寺潮音師の經石の記……文學博士　南條文雄
◉和蘭陀より……文學士　近角常觀
◉英國通信……信眞……（在倫敦）伊東思恭
◉德義の實行に就て……社會……無涯生
◉新內閣の成立◉大擧傳道に就て◉清國杭州に於ける教界の近況◉愛國婦人會の近況◉福田會育兒院◉紛々錄

第五十七號

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第五十六號目次

社説 ◎女子教育◎勤儉貯蓄
論説 ◎感化院の設備……（安達憲忠）
雜録 ◎日本花祭（其六）……（在伯林）（近角文學士）
信眞 ◎不諍の心……（藤澤文學士）
令音 ◎新山吹譚（承前）……（文學士甲南生）
社會 ◎現在の政界◎社會民主黨の禁止等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年六月十四日印刷
明治三十四年六月十五日發行

發行兼編輯人 百目木智璡
印刷人 清水朝太郎

政教時報

政治家、宗教家

日本の政治家、僧侶といふ語は、英語のステーツマン、プリーストといふ語と其意義同樣でなければならぬ筈である、然るに其實は音味が大に異なる樣に感せられる、ステーツマンと言へば唯日本の政治家といふ樣に政治上の掛引が巧で、所謂政略あり手腕あるといふばかりでは無く、何となく氣高い所がありて、信仰があり操行が正しい人らしく思へる、又プリーストと言へば、管に說法をしたり御葬式の導師をしたり、又は濾酒として浮世と相關せざる者の如く、獨り己を潔うする者の如くは聞えぬ、必や胸中には燃ゆるが如き信仰と共に大抱負大經倫を藏めて、社會に活動する者の樣に思へる、日本では之に反して、政治家には德行や信仰は不必要のものである、大行は細瑾を顧みずとか、英雄色を好むとかいふ樣な格言が何時の間にやら製造せられて、色を漁せぬ事には英雄の資格に不足した所があるかの如くに感せらるゝ樣になり、僧侶と言へば、山林にでも這入て行ひ澄ましてる者らしく、ソー言ふ人は實に超凡脫俗で有て、僧侶らしいと褒める、例して見れば歐米ではクロンエルと言ひ、ワシントンといひ、其他幾多の豪傑大政治家と言ふものが概ね皆敬虔なる信仰に富んだ人々である、近代の大政治家ビスマルクやグラッドストーンなども實に信仰の厚い人で有た、然るに日本では政治家と言へば不品行無信仰が當然の樣に思はれ、偶信仰のある政治家があれば、夫は政略の爲に宗教信者の顏をして居ただらうといひ、或は實際家康が念佛を唱へたと言ふことが有たらうか、北條氏が代々禪宗に凝たのは經濟上の考から來て居るのであるなどゝ眞實の信教心とせずして外に解釋を求め樣とする、して又宗教家にして少しく、經世上の事を口にしたり手を出したりすると、直に俗僧賣僧を以て却ける、ドーシテも邦人は宗教と云ふものを眞實に理解する事の出來ない殺風景の人民である、固より政治と宗教と云ふものは其範疇を異にしてるには相違ないが、政治家とても宗教を信じ、宗教家とても政治に注意するは至極當然の事である、加之政治家といひ宗教家といひ、其目的は經世濟民と言ふことが重なるものと成りて居ることは同一であるから、互に相觸れ相重りてるのである、其事業の範域は俗に言ふ輪違になりて居るのであるから、其政治家と言ふ者は日本人の思想に浮び來るものよりは一層宗教家らしい性質を持つべきであらうと思へる、クロンエル、ワシントン、ペートル大帝、グラッドストーン等は、日本人には理解することが出來ぬ程、若し理解するならば政略では無いかと疑ふ程宗教熱心である、ルーテル、カルビン、ロヨラ等は日本人の目から見ると彼等は一種の政治家に過ぎないと見える程、政治家的性質に富んで居る、併しこういふのが眞の政治家眞の宗教家であると彼國では思うて居るのみならず我々日本人の耳にもステーツマン

と言へば、日本現今の政治家と言ふよりは操行が修りて宗教家に近い者と思へ、又ブリーストと言へば今日我邦で僧侶とか宗教とか言ふものよりは一層世間的で政治家の半面を具備する者の如く思へる、勿論西洋にも隱者的宗教家もある素行の修らぬ宗教心の薄い政治家もある、けれども夫等は却て一般が豫期する思想とは違ふ、日本の如く政治家で操行の正しいのは寧ろ變人の如く、宗教家にして世間の事に口を出せば越權な突飛な賣僧の如く考へられるとは大なる相違である、時と場合によりては日本の如き思想が宜しいかも知らぬか、日新の文明世界に處しては、日本の如き政治家は仕度い儘の不品行を爲す特權を有するかの如く思ふ思想は一日も早く改めねばならぬ、政治家は宗教の事を言說するを恥づべきことの樣に思ふは明に謬見である、又經世濟民を旨とする宗教家が社會の事に容喙すべからずといふ樣な議論も正鵠を得たものでは無い、して見ると政治家宗教家の性質範域を全く離して仕舞て考へる所の日本流の思想は、一方は不品行無信仰を却て自慢する樣に成て、社會をして腐敗墮落に傾かしむる恐れがある、又一方は此腐敗墮落せる社會を救濟せやうと勵まずして徒らに厭世的に傾かしむる嫌があるかと思へる、固より孰れにしても數へ立て〻見れば弊害は免れ得まいが、今の日本には矢張り歐米風の思想を輸入して弊害を矯正する必要が有るであらうと思ふ

一体日本の人は宗教家を輕蔑する癖がある、歐洲の人が偉人豪傑を數へ立てる時には、ナポレヨンやフリードリッヒ大王を數へ擧げると同時にルーテルやカルビンに指を屈することを忘れぬ、併し日本の人は傳教弘法や親鸞日蓮の如き人を偉人であると思はぬではないが、扨偉人に指を屈し掛けても決して秀吉、家康等の第一流の豪傑と同時に指を折らぬ、十人も十五人も政治家や將軍やを數へ上げた後に漸く番が廻りて來るのである、精神的事業に從事する者は何故日本人には尊敬を拂はれぬであらうか、唐の韓退之も孟子も聖學を皷吹して異端邪說を防遏したのは、精神界の洪水をせき止めたので、夏禹王が大洪水を治めた功にも劣らぬと賞讃して居るが、日本人には恐く此議論は誇張な空論とより外は聞ぬまいと思ふ、外の事は措いても彼の親鸞上人が迷信斷絕に力められた事ばかりでも、其功勳の偉大なることは測り知られぬ斗りである、けれども是を見る丈けの一隻眼を具へた人は至て少い、大抵は之を見ることの出來ない近眼者流である、またオカシイ事がある、建武中興の大業を翼賛したものは新田楠諸公を始め概ね皆贈位贈官等もあり、又夫々神に祀られた樣である、然るに當時叡山南都を始め、伯耆の大山寺、陸奥の靈山寺等の僧侶にして、或は祈禱に懇誠を凝らし、或は軍役の間に忠義を盡した者は非常に澤山なことで、史乘に明記せられて居る丈けでも餘り少くは無いが、今に何の沙汰の有たことをも聞かぬは、聖世の恨事であると思ふが、兎も角も邦人の精神的事業に重きを置かぬからして、宗教家を度外視する一端が知れる、斯る思想界の傾向では、眞の高等なる文明の域に達することはまだ〻〻程遠い事で有らうと思ふ、今少し精神的

事業に同情を表し尊敬を拂ふ樣になれば、宗教界に偉人も輩出する樣になり、又政治家の不品行も多少は直る樣になるであらう

論說

廢物利用

村上專精

社會の進歩、個人の發達皆廢物利用より外はありません、此廢物利用の程度によりて文明と野蠻、賢と愚との差別が出來るのであります

凡そ國あれば必ず宗教あり、人あれば必ず教育あることは、皆廢物利用に過ぎないものであります、教育と云ひ、宗教と云ふも廢物を益に立つようにすると云ふことである、凡て物と云ふものは棄つべき物の中にも用立つことあり、古着や紙屑でも上手に使用すれば立派の者となる、甘く利用し來るのが乃ち文明開化となる譯です、今日の時代と德川の時代とは非常の相違、非常の變遷であります、殊に電氣燈や電話等は私共の幼時には夢にも見ることが出來ません、昔はかゝる物は人間以上即ち神として思ふたに違ひありません、今日では電信、電話は一種の器械となりました、これが廢物利用と云ふものです、又昔は葡萄酒や、麥酒の製造法が少しも知らなかつた、併し是等の原料が其昔から備はつて居りましたけれども、所謂廢物利用の考へがなかつたのであります、以上は物質上に於ける廢物利用であります、

要するに天地萬物は今古を通して何等の變遷なけれども、社會が文明に進むに從ひ利用する樣になつて來たので、學問の發達や文明開化は廢物利用と云ふことに歸着するのです、他の宗教は暫く措き、佛教も全く其通りであります、釋尊より今日發達し來たのも、廢物利用と云ふことを吾々に敎へたものです、これは物質の廢物利用でなくして、吾々の精神の廢物利用です、

佛教では吾々の靈魂と云ふものは、無始本來のものにして、千年萬年と數へ盡すことの出來ない本來法爾のものであると云ふ教である、この靈魂の事は少しく六ケ敷なりますが、併し吾々の心とは如何のものであるかと云ふに、千有餘人の中で一人も同じ心を有つて居るものはありません、此間汽車中でこふいふ話しがありました、それは世の中に同じ顏のものが一人もないと云ふのは實に妙だ、神樣は餘程細工が上手であると云ふ話でした、實に世界の人口は十四億もあるが一人として同じ顏形の者はないから、顏形も十四億あると云はねばならぬ、

これと同じくこの心と云ふものも一人々々皆別々のものでありましたならば、現在生きて居る人の心も十四億あると云はぬければなりません、然るに其十四億の心を私共の一人の心の中に一々皆有つて居るのです、例へば茲にあります花瓶が宇宙萬物如何なる物でも作ることが出來、且つ三角なり四角なり如何樣な形狀にでもなります、この花瓶には萬物の形が

少しも欠けめなく、圓滿に具足して居ると云はぬければなりません、私共の心も其の如く人を殺す心も、君に不忠をなす心も皆悉く吾人一心の中に具りて居るのです、而かも君を殺し親を殺す恐しき心の外に、君に忠を盡し親に孝を致す心があります。即ち親を殺し君を殺す心が其儘親を扶け君に盡す心となるのです、

宗教、少くとも佛教の精神はこの國家に害毒を與ふる心を轉して立派の心にすると云ふが主意本旨であります、昔し釋尊の御生なされた頃、印度には種々の外道婆羅門がありました、どういふ教苦行外道と云ふて一種奇妙の教へがありました、どういふ教であるかと云ふに、何事も苦めさへすれば後に樂が來る、初めに樂めば後に苦まねばならぬ、死後樂まんと思ふならば此世に生きて居る中に苦んで置かねばならぬと云ふ主旨でありますから、この外道の修行は隨分殘酷極るものでありまして、種々苦行のある中でも最も困難なる行は食欲禁制であります、この食欲禁制によりて死後樂しい所に行けると云ふ考から、先づ一日三度の食事を一度に減じ、次に二日に一度三日に一度、十日に一度といふ工合に漸々減少し遂に餓死するを以てこの外道の本領としたものであります、

今より十有餘年前、巢鴨の監獄が未た石川島にある時分、私が尋ねてゆきましたが、其時恰度今の片岡健吉氏が國事犯で入獄して居られたのが出獄したばかりであつたか、其話によれば入獄中最も困難であつたのは食欲の滿足を得ることが出來なかつたことであると云はれました、例へ金殿玉樓に住む人と雖もこの欲に迷はされないものはありません、然るにこの欲を禁制すると云ふことは到底耐へられないことであります、依て釋尊は斷然この外道に反對なされまして、一切衆生依食而住と御說きなされました、何となれば世間一切の人は上下古今に通じてこの食物によりて生存するが爲め、食物を禁制することは實に愚の極であります、併し佛教の食物には種々の區別があります、(四食經を看よ)大體申しますと、四種の區別があります、第一段食、これは有形的の食物にして茶でも水でも皆この中に攝められるのです、第二觸食身に觸るゝものも一種の食物としたるものにして、衣類等を云ふのです、第三意志食、第四識食、此二つは肉體的以外の形のない精神上の食物であります、即ち無形的の食物とは外でありません、宗教道德其者であります、この精神的食物が缺乏しますと監獄の厄介になる病人が出來るのであります、どうしても宗教道德は益〻奬勵し發達せねばなりませぬと思ひます

右は四恩瓜生會の大會に、博士の述べたる大意を筆記したるものにして、校閲を請ふ迄なかりしを以て、若し誤謬もあらば、こは記者の罪なり、讀者諒してよ

記者識

* * * *

經濟界の恐慌に就て佛教家に望む

諏訪谷生

近頃都鄙到る所として不景氣の嘆聲を聞かざる事なく京坂地方を始め其他全國數多の銀行は預金の取付に遇ふたが爲に破綻に傾むひたとか或は某會社は支拂を停止したとかイヤ某は時は新聞紙が毎日のやうに經濟界の恐慌と商業不振の報道を頻りに傳へて居たのであるから一方では學者や政治家は諸種の雜誌やら新聞紙や何にかで不景氣の原因を講究して此れ全く廿七八年の戰爭後國家の實力以上に不生產的軍備を矢鱈に擴張したるからであるとか或は清國償金の輸入を幸ひ前後を顧ず無暗に金貨本位制度を取つて通貨を膨脹せしめ中央銀行が飢者に水を與へるが如く虛業家等にズンゝ貸出して的度なしに事業を起さしめたからであると云ひ或ひは英杜米比北清事件等の昨年來の引續きの三大戰爭の影響が全世界の經濟界をして不振に陷入らしめたのであると云ひ又或論者は國民一般が近年勤儉貯蓄の精神を缺き奢移に流れたからだと云ふ論者もあり其他種々樣々と議論をする者もあつて甲論乙駁と云ふすがたであつたが要するに經濟學者を以て平常自ら任じて御坐る大家先生達も現今の如く商業社會の不景氣に陷入つた原因を明瞭に說明した議論は未だ出なひよふであるが何にせよ一般商業界は不景氣であつてどをしても今年は愚か來年も來々年も打續ひて愈增悲境に沈臨するにも知れぬと云ふので今日の所では一寸回復の見込は立たなひから昨今では府下でも隨分舊家で實力がありと認められてある手堅き商業家ですら人知らずの內に密に使傭人を減じて人前をつくろふて居る商店も尠なくない何人でも解かる早ひ所が日本のマンチエスターと云はれる本所や深川邊へ行つて見ると現に煙突の烟が薄らひだのみならず甚しきに至りては工場とは其の名ばかりでからきり烟の出ない工場も見受けられるこんな調子で商業家も工業家も皆が遣繰り算段で一時を糊縫して居る有樣であるから今まで府下でも有力者として社會に相當の信用の有る連中で或は破產の忌はしき尻尾を出す人が出來る爲に或は京阪地方のよふに小銀行などが取付に出遇ふて破綻する銀行なども出來て經濟界の一大悲慘なる恐慌が首府の東京で起るかも知れぬ眞に經濟界の前途は氣遣かはしき者である而して工場などが斯ふ云ふ始末であるから職工なども追々解傭せられて何人も傭手がないから直ちに食ふ事に困難してくるが身體の丈夫で心の正直な者は人力車夫となつてなりと何にとか正業に付いて生計を送るが其內で性質の惡い奴等は小人窮すれば爰に亂すで小盜と商賣更へをして公安を害し良民を苦しめる者が增加したそうである又女工の解傭せられた者はこれも正直な者は下女奉公をするか或は國元へ差してやし〳〵歸る者もあるが性質の惡るい怠惰の奴は直きに淫賣婦となるか或は日本特有の公娼と陷ぶれて苦界に身を沈めて風儀を亂すよふになつて行くのであるからして商工業の不景氣と反比列で繁昌してくる者は警察署と監獄署と而して養育院とであるからして此の經濟界の不振と云ふやつは一身一家なり國家の不幸は申す迄もなく人類同胞の不幸であるから世界主義であるとか何んとか云ふて比較的に空理空論を唱へて自ら快哉として獨り喜んで居る哲學者や宗教家でも涙あり血あるなら

ば此の經濟界の非境になつたが爲に人類が種々の罪惡に陷入り生きながら畜生道や餓鬼道を現世に構成するのを見て我は哲學者なり宗教家なり宜敢社會は分業法を以て進歩せしめざる可からずと云ふて經濟不振なんぞを彼是云ふのは商賈違ひだから財界の事は我れ關せず焉とすまし込み冷然として對岸の火災視する事は出來まひと思ふのであるだが吾人は哲學者や宗教家に向ふて經濟家的の救治策を講じよふと要求するのでもなく勿論貨幣の本位論をせよと云ふが如き無理なる注文をするのでは決してないが宗教家は宗教家として此の際大ひに財界の爲に盡くすべき方面が有りと思ふ成程アダム、スミスが云ふた分業の利益は只に產業社會に偉大なる進歩を與へるのみならず實に分業の達發は社會全般をして非常に進歩の速度を增加せしめるのである今日は分業から分業に移りて產業社會では彼の單純なる針一本を製造するにすら已に六十種の分業は行はれ居ると云ふ迄に進歩はして居る夫れだからして此等の工業に從事して居る職工の如きは針製造所に永年傭はれて居りながら自分以外の工室にては如何なる事をするかを知らぬのみではなく完全に出來上ッた一本の針なる物を未だ嘗て一度も見た事がないと云ふて居る者もあるうである斯ように人間が生命ある器械同樣になると云ふのは吾人は人間と云ふ價値から看て如何なる者であるか考ふ可き疑問であると思ふが此れ生產社會の事だから先づ別問題として置て扱て吾人の社會全体の人物等を一瞥せば又此の一工室の職工に似たる人物が社會には非常に多いではなひかと思ふなる程人間は萬能ではないから分業的に働かねばならぬ吾人は分業を全く否定はせぬ然しなから吾人が共存的社會に生活して社會の進歩を計らんと想はゞ餅屋は餅屋酒屋は酒屋と各自が分業をなし行くは勿論ではあるが其の分業の行はれる間にしかも又た互ひに相共通の所がなくては社會は圓滿に進歩して行く者ではないと思ふ例へば爰に宗教家諸師が溢るゝばかりの熱情を以て衆生濟度の爲に一ッの會堂を建築せんとの企圖あらんか諸師はやはり社會富有の特志なる實業家などに向つて布施を依賴せざるを得んのであるが此の場合に於て例の絕對的分業論を持ち出されて我れ關せず焉と極め込まれた日には如何であるあたら高尚なる宗教家の目的をも達せられないではないか、であるから矢張社會は伊勢は津で持つ津は伊勢で持つと云ふ風で互ひに援け遇ふて行かなければならんのであろふと思ふされば宗教家は如何なる方面を以て實業界の爲に盡すのであるかと云はれると申すまでもなく諸師は此の際日本には未だ發達して居らない實業道德の爲に大ひに力を振ふて頂きたいのである勿論廣ひ意味で云ふ道德なる者は士農工商を問はず人類一般に護る可き者ではあるが商業家には商業家のとくに遵奉す可き道德があろふと思ふ例へば　取引した る約束の時間を違へなひと云ふ事。衡量をば瞞着さゝる事。見本と實物と同一價値の物を届ける事。時價不相當なる法外の高價に物品を賣付けざる事。此の外に列揭し來れば數多くあるけれども先ッ尤も重もなる者は此等の數件である所が我國の商人はどをも是等の道德をば護らないのであつて夫れが

爲に彼の歐米諸國の商業道德の發達して居る國人と取引きをするのに信用が欠けて居るのであるから手形をドシ〳〵便用して以て活潑なる商業取引が成立して居ない實に日本の商人は猿知慧的である現在知れきつたる虛言を吐いて只一時其場を瞞着して利益があればよひとして居る者が多ひのである此れも無教育の商人が迂詐をつく事が商人の本領だと思ふてやつて居るのなればなだ恕すべきであるが先達て澁澤男爵が青年實業團體の朔日會で商業道德につひて一場の演說をせられた其の筆記を讀で驚ひた或時の事大學卒業の青年實業家が二三人會合しての談に商業家の資本は半ば金にして半ば虛言にありと論じた者があつたとの事で男爵は大ひにさる考への誤りなる事を論破した云ふて朔日會の青年諸氏を誡められた堂々たる帝國大學を卒業した高等の教育ある高襟實業家の人々ですら斯ふ云ふ思想が我國の商業界に未だ横はりてあるのであるして見ると日本の一般商人の道が德低ひのも無理では ない又吾人が嘗て或る新聞に講談が揭げてあつたのを一寸と讀んで見たら大坂の有名な某商人の傳記であつた其の中に某が自分の使傭人等を集めて商人の心得ふ可き訓誡を與へた條目の中に商人は尤も上手に虛言をついて他人に品物を賣付る可しと云ふ條があつた此れは講談の事であるからして全く信用するには足りなひが兎角日本商人には虛言をつくと云ふ事が始と御定まりとなつて居るのが此等の事柄を見ても商業道德が如何に廢頽して居るかゝ解かるのであるから吾人が宗教家諸師に希望すると云ふのが爰である此の根本的誤謬の思想が日本商人の腦裏に固着して居るのを勦絕してもらひたいのである此の根本的誤謬の思想が横行しつゝあるから世界の市上に於ては其の信用の點に於ては遙かに支那商人よりも劣つて居るのである成程日本は其の國際條約の文面上に於ては歐米各國と對等ではある又北清事件では戰爭が存外日本兵士の强ひのでは歐米人も舌を卷ひたがさて平和の戰爭なる商業の取引上などでは東洋各國の市場は申すまでもなく我が內地の神戸横濱ですら歐米人と直接の取引きに於て其の信用の度合は頑迷だと云ふて輕蔑して居る支那商人にも數歩を讓つて居る有樣であつて東洋の先進國民だとか何にとか無やみに空ら威張しても其實支那商人の手をへなければ商業上の取引が歐米人とは直接に出來なひと云ふ可憐なる弱點がまゝあるのである此れが即ち猿知惠的であつて商業道德が發達して居らずして信用が薄弱であるからである此の信用の厚薄は商業貿易の盛衰に大ひに關係を及ぼすのである現に日本の實業家が先年來の不景氣を回復しよふと云ふ策で外資輸入を渴望して手を更へ品を更へ種々なる方法を以て外國の富豪に取入らんとするも日本商人の對物信用よりも寧ろ對人信用が薄ひからして外國人が資金を投下する者は極々僅少しか無いのである又彼の外國人等は政府の保証に立つて居る日本銀行が正金銀行か其他の私立では一二の手壓ひ銀行より外か其他の數多の銀行とは決して取引きをせないのである現に日本の內地の銀行は七朱の高利子を付して預金を吸取せんとして居るにかゝはらず彼等外國人等はやはり僅かに三朱か四朱位の極く利子

の安ひ外國人の設立にかゝる香港上海銀行か露清銀行へしか預金をせなひのである此の邊から考へて見ても未だ世界の市場に於て日本商業的信用の餘程ど低ひのを確かに證據立てゝ居るのであるからして吾人は確に日本の商業道德が發達して居ないのが今日の不景氣を來したる諸種の原因中の一大原因であると云ふ事を信じて疑がはないのである夫れであるから澁澤男爵の如きも此處に氣がつかれたと見へて先日朔日會で商業道德を青年實業家に向ふて皷吹せられたのであろふと思ふ而して高等商業學校でも先年來中島博士が商業道德を一學科として講述せらるゝのであるが、どうも先生の說は利己主義から割出された道德說であるからして吾人には滿足が出來ない然かのみならず外の學說なればともかくも倫理とか道德の事になると學校の敎場での講義は敎師も學生も義務の如く心得へて嫌々ながらも學科だから聞くと云ふやふな弊もあるから實行の上では存外効力がなひ而して時事新報の如きも折節商業道德の事を揭げるけれども是れは例の三田一派の淺薄な利己主義の立脚地から論ずるのであるから寧ろ吾人には一笑に附するの價値しかないのである要するに彼等の如き無宗敎者の道德論は學說上から觀ても淺薄であるのみならず實行上に於ては少しも効力は無ひであろふと思ふのである

からして吾人は是非共我國の宗敎家殊に佛敎家が善惡因果應報三世通達の高尙なる理法から說き及ばして眞實に情神上からして彼れ商業家の道德の高かまるよふ不景氣の時期なる此の際を利用して逃がさず商業道德の發達するよふに各佛敎家諸師が國家と人道との爲に振ふて盡瘁せられん事を希ふのであります

社會

新內閣の成立

伊藤內閣瓦解の後、月餘にしてはじめて新內閣の成立をみる、試に新內閣の顏觸をみよ

內閣總理大臣　桂　太　郎　　內務大臣　內海　忠勝
遞信大臣　芳川　顯正　　大藏大臣　曾根　荒助
司法大臣　清浦　奎吾　　文部大臣　菊池　大麓
農商務大臣　平田　東助

右の外陸海軍は依然留職となり、獨り外務は大藏大臣の兼任となり、辛うして內閣組織は玆に一段落を告けぬ

思ふに新內閣は元老の如き聲望なく、又政黨の後援あるにあらず、其前途決して平坦なりと謂ふべからず、此際政黨の嚮背如何を觀察するに、政友會の如きは內閣の方針如何によりて贊否を決すべきを議し、殊更に愼重の態度を裝へるは、內閣組織の當初より之か援護の意なきは固と明白の事にして、彼等の胸中左こそと推せられ淺ましき限なれ、例の進步黨は現內閣に接近しつゝありと傳ふれども恐くは風說ならむ、要するに現內閣は前後左右殆と敵と看做さゝるべからず、而して外、極東問題の紛糾して未了に屬するもの、內、財政整理、

行政刷新の二問題の雜然として橫るあり、前途の困難なる想像以外にありと謂ふべし

然れども是等の困難は旣に豫期する所ならむ、此覺悟あり勇氣ありて初めて此難局に當るを得べし、區々の政黨決して顧みるに足らず、現內閣にして國政の實蹟を擧げなば、國民の輿論を買ふや必せり只一意其職を盡すにある而已

大擧傳道に就て

基督敎徒の大擧傳道に就ては吾人其報道を怠らざりしが、頃來彼は東京市の或部分を劃して盛に傳道を試む、其規模小なりと雖も志の大なる吾人は決して看過すべからざるものあり、即ち彼等は會堂に於ての祈禱說敎を以て滿足せず、訪問傳道をなし、個人傳道をなし、或は知己より知己に、或は友人より友人に傳へ悉く誘ひ來りて神の福音を授けざれば止まず

その意氣壯なりと云ふべし、之が爲めに多きときは一日三百餘名の信者を得たりと如斯にして彼等は敎界線を擴張しつゝゆく也、吾人の感ずべきは彼等の名利以外に立て熱心に誠實に其職を盡すにあり、彼は紛々たる毀譽を意に介せざるにあり、これ素より當然の事にして宗敎家は常に此心を以て心とせざるべからず

顧て我佛敎界布敎の狀態を觀るに、所謂本山なるものが使僧を派して傳道を試むる所以のもの、多くは敎田開拓の任にあらずして其目的他にあるを知らば、吾人は實に嘔吐に堪へざる也、吾人は敢て本山なるものゝみを咎めず、佛敎家と云はるゝ者が果して異敎徒の覺悟ありや否や少しく大擧傳道に省みる所あれ

清國杭州に於ける敎界の近況

日文學堂長文學士伊藤賢道氏より松見得開氏宛に發せられたる五月十五日付の書面によれば眞宗大谷派本願寺の事業として旣に着手し且つ關係あるものは

一、日文學堂　日英兩文を敎授する中學程度の學校なり
二、開導學堂　漢文を以て普通學を授る支那的小學校なり
三、武備學堂　日本の陸軍士官學校及幼年學校に相當するものなり
四、滿州旗營東文學社
五、證林編輯所
六、學科書編纂
七、明末以後之佛敎史略編纂

にして去る八日より更に杭州八旗營內へ同僚の一人を派し日本文幷に數學を敎授せらるゝ事になれりと云ふ

愛國婦人會の近況

同會は本年三月始めて設立せられたるものなるが婦人の同情を寄するもの頗る多く會員次第に增加して旣に六百餘名に達したる趣なり主唱者奧村五百子女史は先頃東京に於ける一切の事を役員に委かせて京都に至り同地に支部を設立する迄に、運び廣島にても亦頗る好況にて此頃同地を出發して鄉里佐賀

に向ひたりと

福田會育兒院

▲福田會の由來　明治九年三月六日今川貞山、杉浦讓、伊達自得發起して佛教の慈悲利物の旨趣に基き、汎く貧困無告の兒女を養育せんとの目的にて會を起し、爾後緇素の有志陸續入會し始めて會名を福田會と稱し、兒女收養の所を育兒院と名けしが、同十二年に府廳に稟申して允准を得、同四月一日にいたり育兒院を設立し、實際に兒女の收養に着手せし所、同廿二年十月毛利公爵夫人外十名の閨媛發起して、別に會中に惠愛部を設立し、專ら院兒の養育を於當せり、斯て同廿四年三月廿五日　皇后陛下思召を以て年金三百圓を下賜され翌四月廿一日行啓あらさられ、同三十二年三月十五日年金七百圓增賜の御沙汰あり、同年二月にいたりて文秀女王殿下總裁に上任あらせられしが、以上は福田會が今日に至るまでの概況なり

▲入院の幼稚者　入院の幼稚者は當歳より滿六歳までのものに限り、之を總て院兒と稱呼し院內院外の二種に分ち收養せるが、入院者の籍は孰れも麻布區笄町長谷寺境內なる福田會に置くものにして、現在の小兒四十餘名、また里に在る幼兒二十餘名あり、里子に就て事務員は語れり「幼兒は中々面倒で在います、現今はみな里に遣て置ますが、其の場所は神奈川縣の……アノ多摩川向ふの、眞絹だの王禪寺だのと申す田舍で在います、始のうちは府下でも遣て見ましたが、何うもうまく參りませんでした、ソレも參りません道理で、小供を預る方がまた貧窮人で、貰ふ里扶持を生活費の足にするやうな次第で在いますから、小供の爲にもよろしく在いません」と、尙ほ幼兒に就て言ふ

▲幼兒も仕合せ　現今は神奈川縣へ參つて居る幼兒も仕合せで在います、小供を預る里が大概土地での資產家ではあるし、孰れも我子のやうに育てゝ居りまして、中には規定の保姆の外に、老婆などが附切りで居るものさへあつて、中々ソレは、大切にいたして居りまする、先づ斯ういつたやうな風で在いますから、まことに兩爲でして、中では隨分里流れになつた小供も多う在います、夫から此の院外保姆のことで在いますが、是は每三ヶ月に一回づゝ、院員を派出して、養育の樣を視察させて居りまする

▲院外の教育　院外の教育法に就て又言ふ『里子のことは前にも鳥渡申し上て置ましたが、之を院外教育と名けて居りまする、ソレで院外教育の里扶持料などは、どんな風であるかと申しますれば、之も其の時に物價の高低に應じて常費より支辨することにいたしました、其の送り迎ひなどの費用は之は臨時費を以て支辨いたして居りまする

▲里子と慈善家　夫から此の里子の院外養育は年を三才までと極て居りまして、滿三才になりますれば、之を院へ呼戻すことにいたして居りまする、併しコウは規則が極つて居ますが、何にいたしても幼兒のことで在いますから、場合によりますと其の保姆を慕ひまして、何うも俄かに引離すことの出來ないやうな次第に立至ります、ソウいふ時には何うもいたし方が在いませんから、姑く猶豫をすることにいたして居りまするが、之は滿五歳を越過せしめざるとにいたして居りまする、ソレから慈善家で自費を以て、院兒を教育といふ方が隨分ございます、斯ういふ場合には惠愛部の意見を問ひ其の時々契約を結ぶことにいたして居りまする』また保姆に就て言ふ

▲保姆は面倒　なもので在います、兎に角頑是なき小供が相手で在いますから、隨分氣骨の折れることだらうと思ひます、夫から保姆を雇入るゝのも中々困難でして、人があるからオイそれと直雇ふ譯には參りません、先づ本人の戸籍身分性質から、其の素行にいたるまでを十分に探らせまして、其の探檢書を以て惠愛部月番幹事の意見を問ひ、幹事可とする時は會議に附して採用することにいたして居りまする、夫から別に保姆長といふものがありまして、各保姆を監督して其受持の勤務を執行せしめて居りますが、之は無論普通教育の素あり、兼て兒女の鞠育に手慣たるものを選任いたして居りますると』また院外養育を託する保姆に就ても、採用の際には院內保姆を採用すると同樣なる手續を行ふものなりと云ふ

（未完）

紛々錄

◎某の日、某の歐洲に遊ぶを送るとて祖道の宴を張りね、轉て發起者の一人は起て縷々送別の辭を列れたる後、君が一人の力にては此等の事は爲し得べからざらんと云はれし時は、吾等一同は其人の顏を見上げね、

◎虛禮虛飾の甚しき今日、かゝる無遠慮の辭も强て告むべきに非ざるも、吾等は耳鬱りのこゝちして甚だきゝ苦しかりき、送別の辭を述べしは誰ぞ、其人こそこれ新に博士の學位を授けられし某氏也

◎東京市水道栓より蛭續出し、市民爲に色を失す、若し蛭に代うるに蚊の出づるあらば、彼等の驚喜手の舞、足の踏む所を知らざるべし、人間は飽迄利害問題の人なるこそ面白けれ

◎西本願寺にては普化會あり、東本願寺も亦普宿會起ちむとす、兎角元老の世の中、政治家も宗教家も

◎辯護はあしき事にあらず、既に辯護と云ふ、幾分か悪しき事迄辯護するは事實に於て免れざる所、斯の如くんば辯護者それ自身も罪惡を犯すゝとなる、友の爲に辯護するもの宜しく一考すべき事也

◎善を爲さんとするもの、多くは報酬を求むる心に出てざるはなし、この心あり友の美を彰さんとするものあらむか、吾は隨なりとして之を斥けん

◎佛教青年會の夏期講習會はいよ〳〵、長野市に於て開會する事に確定しぬ、海水に浴する便を欠くと雖も、久しく人口に膾炙する善光寺あり、古戰場の河中島あり、勝地敢て少しとせず、例によりて諸講師は長廣舌をふるはるゝならむ、青年諸氏須く來りて、無妙甚深の法味に浴し、穢心を淨めされ

雜錄

西教寺潮音師の經石の記

南條文雄

潮音師の履歷は政教時報第五十一號（明治三十四年三月十五日發兌）一六頁以下の本多君の先德餘香に詳かなり、本年五月二十二日師の實家なる四谷區傳馬町加藤氏の宅に於て棲心會の催ありし時始めて師の經石なるものを見ることを得たり、而して今六月三日其近傍に於て復た同會の開設あり、其石に書せる所の教文と記文との寫を得たり、因て其教文の意を講して余の責を塞ぎ、更に之を寫して時報に投じ師の篤志を世に紹介せんと欲するなり、其記に曰く、

東京城駒込西教寺第八世釋惠海和上、諱潮音、四谷傳馬町三丁目加藤家產也、堂宇建築之際、後門柱礎下、數千萬石、經文書寫埋投、明治年度、再建擴造之爲、經石堀現、倚緣由、該家第七代加藤長九郎讓受也、

明治廿六年夏月

右經石墨色消、拜見序手、觀經義文意書證者也、

以上は某僧の記する所と云ふ、石の三面に敎文を書せり、二面は三行、一面は二行にして每行七字なり如左、

佛本願力无過者
釋迦如來是眞實
慈悲父母也種々
善巧方便令發起
我等無上眞實信
眞心徹到厭苦娑
婆忻樂无爲永歸
常樂但無然之境

案するに第一句は、淨土論の偈に、觀佛本願力遇無空過者、能令速滿足功德大寶海(此四句は行卷十二丁右に抄出)とある前二句中の文字なり、即ち高僧和讃に本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなしとある前二句の意なり、

第二句より第五句に到る四句は、般舟讃の初に、敬白一切往生知識等大須慚愧釋迦如來實是慈悲父母、種々方便發起我等無上信心(以上三十五字信卷本十五丁右抄出)とある中の釋迦以下の文字を取り、和讃の文字等を加へしものなり、和讃に曰く、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を發起せしめたまひけりと、併せ考ふべし、

第六句より第八句に到る三句は、觀經序分義欣淨緣の下に、言願我未來已下、此明夫人眞心徹到厭苦娑婆欣樂無爲永歸常樂但無爲之擴不可輕爾卽離苦惱娑婆無由輒然得離自非發金剛之志永絕生死之元若不親從慈尊何能勉斯長歎(眞心已下至斯長歎信卷本二十九丁右抄出、然勉作免)とある中の、眞心以下の廿一字を其儘錄出したるものにして、和讃には、眞心徹到することは、金剛心なりければ、三品の懺悔することゝ、ひとしと宗師はのたまへりとあり、

右の如く聖敎の文を書せし石は殆んと千萬を以て數ふべき程ありしとなり、西敎寺本堂再建の際、再び埋沒し了ると聞く、然るに此一石幸に潮音師の實家たる加藤氏の手に落ちしより、師の筆蹟と共に其報恩の至誠を見ることを得たり、奇緣の思止め難し、因て其顚末を記すること此の如し、

和蘭陀より

近角常觀

拜啓葉書差上候通り當地にて(伯林)釋尊降誕會を營み申候初め池山吉田君と謀り、薗田君姉崎君巖谷君とも謀り、遂に意外の好結果を得候、不取敢當地新聞の批評を譯して「日

本」新聞へ投書致置候間「政敎」紙上に御轉載被下度候、(別に認むる程の事も無之と存候)猶當日の寫眞有之候間旅行後御送り可申候、昨日より池山君と共に和蘭陀を經て倫敦に至り歸路伯耳義を通るべき旅行を企て申候、只今和蘭陀に滯在仕候、同地は慈善事業盛なる土地にて本日は孤兒院(市立)又ルーテル敎會派の孤兒院又盲學校を一覽致候處、頗る完全にて殊に後者の完全したるには一驚を喫し申候、盲者の獨語、佛語等中々達者なるには感心仕候、音樂等の巧なる實に人をして融然同化せしむるもの有之候、

社會事業に對しては日本は遂に歐州劣等國にも及はぬ有樣に候、何卒佛陀誓願の意を此社會に實現して盲なるものにはかく天眼を與へたきものに候、明日は當地の救世軍を參觀の積に候

此度の降誕會は何となく皆々ヨク氣がソロイ數日間に出來上りしかも、非常の好結果に有之候、タシカに是れ國民自覺の時機來りて其自己の特性を發揮せんとする心が、一般に溢れたる結果と存候、何れ宗敎自覺の時機來ること遠からざるべしと存候、嗚呼大日本佛敎青年會降誕會を肇めてより、第十回に至りて此事あり、一シホ嬉しく喜ばしく存候、諸君と共に佛陀の冥祐を感謝せん哉、二週後伯林に歸りたる後、カール宗敎法を贈るべし、出立後既に一週年に相成候人事匆々の感に不堪候、諸君へ宜敷御傳へ被下度候頓首

和蘭陀にて　常觀

英國通信

(在倫敦)　伊東思恭

拜呈陳ば春暖之時期に相成候如何御消光被爲在候哉小生義無異研究且肥滿致候(肉食の結果)乍他事御休神奉願候當地に着し慈善事業種類幷に數の多きには感心致候英國全體にて十萬餘個と稱し申候英國獨り他文明列國と異り犯罪者の減少するも無理ならぬ事と存候而して孰も源泉を宗敎より發し申居候日本の佛敎も奮勵一番を要する事と信候此頃當地に宗敎博覽會(小なるもの)有之一見するに博覽會としては價値なきものなれとも其宗敎の外國に於ける布敎の有樣を一般に知らしむる策としては上乘の者と存候支那印度亞非利加濠洲南米等の風俗器物等を蒐集しあり申候我眞宗に於ても支那朝鮮臺灣千島北海道等の器物風俗等の寫眞布敎の有樣を知らしむる爲東京京都等にて之を開き世人をして如何に大谷派か盡し居る歟かを知らしめば利益不尠事と存候而して金錢は百圓も有ば出來可申候又當地には宗敎雜誌上に布敎家屋の寫眞布敎者の報告幷に人物の寫眞等を掲載し義捐を募り居候隨て婦人小供と雖外國布敎の有樣を知悉し義捐箱を各自所有して每朝若くは每日曜義捐樂投致居候日本にては宗敎家の實際の働樣を知らざるより唯本願寺は金を集むる者とのみ信し居候僧侶と雖大派の外國布敎の有樣を知るもの幾人かある況んや俗人をや是知らざるものゝ罪に非すして知らしめざる者の罪に非す哉此他申上度山の如きも紙數限りあれは追而可申上先は捌筆亂筆御宥恕奉願候匆々敬具

信界

德義の實行に就て

無涯生

此頃自分はつくづく、なぜ斯く何時までもかく淺間敗心が直らぬであらう、どうしてこう實行と云ふ事が出來ぬであらうと思はるゝ、それも無教育で德義と云ふ事も修養と云ふことも、知らない人なら無理もないが、自分は修身書を習ふたのは小學校の一年生からで、論語や大學の講釋も聞き倫理學もかぢり、口たけは倫理上の問題なぞかれこれと論ずる樣になりて居る、加之自分は人の眠くなると云ふ漢學者の下らぬ倫理の講釋でも、謹聽した位であるから倫理修身上の談話は先つ好きな方で、此種の談話には耳を傾け、又此種の書を愛讀した、けれども淺間敗心は少しも直らず、又德義の實行は少しも出來なかつた。

然るに眞宗の信者の如き一文不智の愚夫愚婦でありながら、大人君子に恥ぢさる行を無意識に行ふて居る、そこで德義の實行と云ふことは、これは學問でないから、倫理學に達して居ようか、修身上の談話を覺えて居らうが、只知りた覺えた許りでは實行は到底できぬ、德義の實行はどうしても宗教に依らなければ眞の實行はできぬ。信念さへ確立したならば自然に德義の實行は出來るものであらと自分は深く思ふた。

そこで信仰を求むる念も盛んになり、罪惡の自覺やら心中の苦悶やら非常なる苦心慘憺の結果で、どうやら信仰は得られた樣で心中の苦悶はなくなりた、其時は實に天に登りた程嬉しく喜ばれたが、續いたのが僅か三ヶ月許りで其後は矢張以前と餘り變りた事はない、只以前に比すれは心は樂になり何となくノビ〳〵した思かある樣になりたが、別段心が善くなりもせず、又德義の實行はよくできると云ふこともなく、つまり以前と際立て變りはない、是れは豫想外であつて信念の確立したら直に道德者になれると思ふたは、間違であつた。

故に先づ自分の經驗によれば、德義の實行は倫理觀念に明なる倫理學者が德義實行者でもなく、又宗教信者は即ち道德者でもないと思ふ、德義の實行は縱令倫理學者でも宗教家でも、別に修養を要する心がけを要するものである。その方法心がけに就ては人々夫れ〳〵意見もあらうが、自分の感して居ることはこうである

先年碁の名人から「碁は勝たんとて打つべからず、負けぬ樣に打つべし」と云ふことを聞た、又一代にして巨萬の富を得た老商人が「金は儲けんとあせるべからず、損をせぬ樣に心掛くべし」と教へてくれた、是等は中々味ある言葉で、此心掛でなければ金もたまらぬ、碁にも勝つことは出來ぬと思ふ、それで自分は德義の實行も是れと同樣の心掛は宜しからうと思ふ、即ち積極的に道德家にならう、善事をやりて見よう、親孝行しやう、慈善を施ううなどゝあせる人は決して德義の實行は恐らくは出來ぬと思ふ、うれよりは消極的であるか、自分は實に汚き心をもち、やゝもすれば汚き行も致兼ねはせ

ぬ者なれば、人の手本となる德者なぞには、到底なれぬは勿論であるが、せめては人に迷惑をかけぬ樣に致したい、人に賞らるゝ樣な行は無論できぬが、せめて人に譏られぬ樣に心がけたい、孝子の樣な立派の孝行は蠢されぬが、せめては兩親に心配をかける樣な事は致すまい、又自分は一國の大臣でも一軍の大將でも亦大實業家でもないから、國家人民の爲めに立派な事業は出來ないが、炭一片でも紙一枚でも、有益な國の實であれば、無益や贅澤に消費せぬ樣に注意し、又衣食住でも、何も綾や錦で山海の珍味に飽き、華美なる別莊で長夜の宴を張り、贅澤三昧で日暮しせぬば生存ができぬと云ふ事でないから、なるたけ、衣食住に就ても儉約し、天下の實を無暗に消費しまいと心がけ、自分一人の損得はとにかく、天下の實を無益に使ひ果たしては、國家に對して不忠なりと思ひ萬事萬端斯く此の心掛で事をやりて行くは、是れ德義實行の手始めで若かも近道であらうと思ふ。

昔關山國師と云ふ禪宗の名僧がありた、或る年の夏弟子と共に例の如く行乞に出た、日中になり非常に熱くて堪へられぬので、或綠樹の下に休んだ、其前に清き川がありた弟子共は早速裸躰になりて川の中に飛び込んでザブ〳〵泳き始めた、國師も餘り熱ひので川の中に這りたが、如何にも惜しそうに少々つゝ水を大切に使ふて居る、うれを見て弟子等は不審に思ふて「この樣に澤山に流れて居る水を、なぜうう惜しうに使ふてこざるのだ」と尋ねたら、國師は靜に「何處にも澤山ありて殆んど價のない水なれど、若し天下一日水なかりたならば、人は一日も生活して居る事はできぬでないか、うれたから水は無上の實である、それを價のないものだと云ふて、無暗矢鱈に贅澤に使ふては勿體ない、天地に對して相濟まないわけと思ふから、己れは天下の爲めに斯く惜んで使ふのだと」云はれたと云ふ話がある。

實に此關山國師の心がけの用意周到なるのには感じ入る、凡ての人が皆な此國師の樣に心がけさへすれば、己れは未だ大臣になれぬから技柄かありても、國家の爲めには蠢されぬの大實業家でないから國益が計れぬなぜゝ遁れる事はできぬ、湯屋の三助でも、釜の前のおさんどんでも、丁稚でも小僧でも、隨分それ相應に國の爲めになり、又德義の實行も出來る、況んや宗教家なぞは此方面からなら、金がなくとも位置がなくとも充分國家の爲めになり、又た德義の實行も大に進むであらふと思ふ

要するに德義の實行と云ふことは、知りた覺た位では無論實行は六ヶ敷、又宗教の信念が確立したから直に實行は出來るものでもない、どうしても、信念確立後、禪宗で云ふ悟後の行、眞宗で云ふ後念相續は大切である、それで確然大悟とか信心歡喜とか云ふ、一念も大切であるが、信後又は悟後の修養も亦同樣に大切である、其の信後又修養に就ては、積極的にかゝる道德を行ふのも斯樣な德義を實行しようと思ふよりは、同じ事でも消極的に人には迷惑はかけまい、國の實は无益に消費しまいと心掛くるは、德義實行の手始めであらう信後の修養の近道であらうと自分は思ふのである

(終)

新刊紹介

靈界之偉人

發行所　麻布飯倉町　森江書店

今や人心浮薄、道義の念蕩然として地を拂うて空しからむとす、營々役々として徒に物質的にのみ耽り、心靈の修養は措きて顧みず、是の時に當りて「靈界の偉人」出つ、眞に一道の光明を得たるの思あり、偉人とは誰ぞ、曰く、ソクラテス曰く孔夫子、曰く耶蘇基督、曰く法然上人、曰く萬蕉、曰くマホメッド、曰く傳教、曰く善導、曰く王陽明、曰くルーテル、曰く日蓮、曰く西行の十二是れ也、皆これ當代に於ける偉人、吾等の常に理想とし崇敬し盛て以て一世の模範とするもの、本書は是等偉人の性行と經歷、或は生涯の事業等に就き、表面より裏面より、左右兩側より、自由に論し自在に說き、七捨七經の妙、吾人をして卷々もく能はざらしむ、靈界の偉人としソクラテス、萬蕉、王陽明を加へたるは耳新しき心地すれども、却て興味を添ふるの感あり、求道の士一讀して可也(定價卅五錢)

佛教信者のよろこび

發行所　京都東六條　法藏館

著者は補祖道君にして、眞宗の教義を極めて平易に且つ通俗に、佛教信者の心得となるべき教々を述べられたるもの、蓋し佛教信者は此書を得て且よろこびべし(定價拾錢)

本部廣告

本會歲末決算上の都合も有之候に付、本誌代金相切れ或は未納の諸君は此際遲くも本月二十八日迄に必ず御送金被成下度此段特に御依賴申上候也

明治三十四年六月

大日本佛教徒同盟會出版部

老川遺稿出版費領收廣告(第七回)

金五拾錢　東京　島地雷夢君　金五拾錢同　上坂海勝君
金弐圓同　柏原文太郎君　金五拾錢同　秃氏　粘祥君
金五拾錢同　龍地實君　金壹圓五拾錢　東京　眞岡湛海君
金五拾錢　東京　岩城蓮乘君　金壹圓　紀伊　田伏隆道君
金五圓　東京　藤井宣正君　金五圓　東京　高楠順次郎君
金弐圓　清國　清川圓誠君　金壹圓六拾錢　東京　小林正盛君
金五拾錢　東京　小林龍惡君　金五拾錢同　中村林盛君
金參拾錢同　荒木眞仙君　金五拾錢同　平野市十郎君
金參拾錢同　丹生谷隆道君　金參拾錢同　山口永隆君
金壹圓同　岩堀智道君　金五拾錢　東京　尾住秀嶽君
金五拾錢同　近藤雄圓君

小計金二十八圓
通計金百二十七圓六十五錢也

第十回釋尊降誕會寄附金報告(前號の續)

金壹圓　和田鼎君
金壹圓　上杉文秀君
金壹圓　虎石惠實君
金壹圓　小原一朧君
金壹圓　德山現道君
金壹圓　有馬祐政君
金壹圓　菊地俊諦君
金壹圓　今川一君
金壹圓　高橋斯文君
金壹圓　山田金之助君
金壹圓　廣瀨晴芳君
金壹圓　淺井秀玄君
金壹圓　常盤大定君
金壹圓　永崎智順君
金壹圓　山本一成君
金壹圓　興地觀圓君
金壹圓　松見得聞君
金壹圓　寶閣善教君
金壹圓　眞岡湛海君
金壹圓　常盤取次君
金五拾錢
小計金百三十一圓五十一錢五厘
累計金二百三十八圓四十六錢五厘也

五月

大日本佛教青年會

四恩瓜生會例會

來る廿日午後一時より
一、場所　小石川區大塚辻町東京市養育院にて
一、時日
一、法要
一、演說　醫學博士片山國嘉氏(照會中)
一、施齋　例月の如く講話後に之を行ふ
一、參觀　來會者の希望に從ひ院内參觀隨意

六月

四恩瓜生會

寫眞は趣味あり尠なくも身體を健全にす

寫眞器械

●素人用
●營業用
●學術用
●旅行用

新形舶來品々

正價附屬品悉皆相添へ壹組金貳圓より參百圓迄

如何なる素人と雖も直に撮影し得る使用書添付す

開業を望む者無料教授す

遠國は小包にて送荷す

注文方御來車の方實驗に供す

定價雜形目錄書郵券貳錢で送る

東京神田區裏神保町六番地九段大通

寫眞器械問屋　東京芙蓉館

(電話本局二千四百七十八番)

精神界

定價一部金拾貳錢半年分六拾五錢

壹年分金壹圓二拾錢(郵稅共)

六月十五日　第六號　發行

◎宗教は目前にあり　◎綠陰◎惡しき名◎君道、臣道◎今の學さ古の學と　◎負ふ者にあらず負はるゝ者也　◎平凡論(藤岡勝二)道德の實踐法(石川成章)夢生睡死觀(有馬祐政)◎精進して、求めよ(浩々洞主)道德の惡悲　宗教の惡悲(曉烏敏)◎廢物利用(村上專精)禁煙(稻葉昌丸)◎入運(詩藤南條文雄)詩神(青木鬼城)◎トルストイ氏の宗教觀(日月)時と力と(月樵)輿の聲(上杉鶴浦)鳴門(筑川)尊者富樓那(多田鼎)◎日本思想界の轉回◎世界に於ける佛徒其他要報數件

靈界之偉人

清澤滿之師等合著◎浩々洞編纂

價卅五錢◎六月中廿五錢郵稅四錢

五月廿八日　全壹冊　發行

蝶が多くの花から、蜜を採て參りますやうに、道を修むる人は、多くの聖賢から、有難い教をいたゞきたいと思ひます。

此書は清澤先生始め十三人、の人々が、ソクラテス、孔子、法然上人、西行法師、又は耶蘇、マホメット等の多くの哲人の言行について、名々の感せられた味をのべられたものであります。

道を修めたゝと思ふ人、佛の御心は、それほど廣大なものであるかを知りたいと思ふ人に、此書を御勸め申します。

東京麻布飯倉五丁目四十四　森江書店

東京本郷森川町四の一二　浩々洞

政教時報第五十七號毎月二回一日十五日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十四年六月十五日發兌

第十回夏期講習會豫告

本會は明治二拾五年、東京帝國大學、第一高等學校、慶應義塾、早稻田專門學校、哲學館、法學院其他公私諸學校に在學せる青年佛教徒相集り組織せるものにして、佛教を信奉する青年學生の中樞團體なり、各學校内佛教青年會は毎月數回必ず其例會を開き講話に演說に各道德上の修養を怠るとなし、而して毎年又夏期講集會を便宜の地に開くを以て例となし、本年に至る迄前後九回、左の各地に開設せり

第一回　攝州須磨浦
第二回　東部鎌倉、西部二見浦
第三回　三州蒲郡町
第四回　相州三崎町
第五回　遠州新居町
第六回　東部陸前松島、西部播州明石
第七回　尾州常滑町
第八回　越前國敦賀
第九回　駿州沼津町

本年第十回を開くに方り地を東西に卜し、西部は伊勢國四日市に開き、東部は信州、長野市に開かんとす、之を從來の地に比すれば、海風颯々、清波に浴するの快は則得難しと雖、此地由來佛緣淺からず善光寺の名久しく人口に膾炙し且附近の勝地又一顧を價するに足る、東京よりする者は、途すがら妙義、榛名の勝を尋ね碓氷の峻嶺を踰え、海面四千尺、輕井澤驛より淺間の活火山を望み、河中島に不識庵機山公の古戰場を踏査し去て姨捨山に上り、千曲の清流を隔てゝ鏡臺山を仰ぎ、所謂田毎の月を觀るも亦可ならずや、若し夫れ鐵路の便を借らば二時四十一分間の行程、直に日本海の北海岸に遊ぶを得べし、健脚の士、講終て後此等の名勝を尋ね、北陸の山河を跋渉するも敢て妨なし、願ふ、全國の青年諸氏、各地の教報を携へて來り會し熱誠なる信仰を以て、北陸の天地に新生命を與へ、活火炎々意氣斗牛の如く、千山萬岳の間無主義無信仰の徒をして顏色なからしめよ

講師

井上圓了師　大内青巒居士　南條文雄師
村上專精師　山下現宥師　前田慧雲師
藤島了穩師　齋藤唯信師　清澤滿之師
釋宗演師　守本文靜師　鈴木法琛師
日置默仙師

（いろは順）

◉教育講習會

本會に附帶して教育講習會を開き教育、倫理、心理、歷史、等の科目中便宜に從ひ之を講じ會員中學士等之が講師に當る

酒生慧眼、本多辰次郎、和田鼎、中尾敎嚴、堀謙德、佐竹觀海、諸文學士

◉會期

七月十六日より二十九日迄二週間

◉止宿費

一日滯在費金貳拾五錢

◉來會申込

は七月十日迄に東京本郷區森川町一番地大日本佛教青年會幹事眞岡湛海宛申込まるべし

◉地方申込

は長野市西町佛教徒信濃國民同盟會事務所へ申込まるべし

◉注意

旅費は東京より長野市迄滊車賃一圓九十二錢

上野發　午前六時　午後三時五分　長野着
同　午前八時四十分　同　六時五分　同着
同　同十一時三十分　同　九時五分　同着

長野停車場前に案内札を出し置くを以て右に御注意ありたし

大日本佛教青年會

◉發行所　大日本佛教徒同盟會出版部